四季の恵みに心湧く

兵庫丹波

兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想

兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想戦略会議、丹波県民局

ごあいさつ

「兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想策定にあたって」

兵庫丹波は、丹波篠山市と丹波市の２市からなる区域で構成されています。

山々が連なる間に盆地状の地形がつくられ、年間を通じて昼夜間の寒暖差が大きく、秋から冬にかけて発生する「丹波霧」は、豊かな緑を幻想的に覆うことで知られています。

こうした特有の気候風土により育まれる「黒大豆」「栗」「大納言小豆」「山の芋」等は、全国に名を馳せ、地域イメージの象徴的なものでもあります。

多くの歴史的・文化的資源、豊かな自然に恵まれたこの地域は、神戸・阪神間から車、鉄道で1時間半の圏域にあることから、都市部に住む人を惹きつけています。休日に遊びに行くというだけでなく、兵庫丹波の魅力に惹かれ、古民家を改装したカフェをオープンしたり、空き家に移住して農業を始めたりする人も増えています。

一方、兵庫丹波を訪れる観光客は、丹波黒の枝豆や丹波栗などの収穫時期である秋頃に集中するなど、季節による偏りがあります。また、神戸・阪神間からの利便性の良さもあり、観光客の大半が日帰りとなっています。さらに、新型コロナウィルス感染症問題等、従来の戦略では想定していない事態も生じています。

これらの状況を踏まえつつ、この地域が引き続き活力を保ち、発展していくためには、各地域で行われている産品のブランド化を尊重しつつ、これまでの取り組みとは異なる、新たな価値を生み出しながら、地域全体の魅力を高めていくような戦略を構築し、地域の関係者が一体となって取り組みを進めて行くことが必要です。

そこで、地域関係者の皆様で構成する「兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想戦略会議」を設立し、ご審議をいただきながら、その成果を構想としてまとめました。

本書は、今後地域でご活躍の皆さんが将来に向けた取り組みを行う際の「よりどころの書」となることを目的とした内容となっています。

ぜひご活用いただき、今後の地域発展の一助になれば幸いです。

令和３年３月

丹波県民局長　飯塚　功一

兵庫丹波の実り・魅力ある
地域づくり構想

目次

ごあいさつ
目次

第 1 章

1. 構想の全体構造と背景

1　構想の全体構造・・・・・・・・・・・・・・P06
2　兵庫丹波の農畜産物について・・・・・・・P06
3　背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P10
4　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P15

第 2 章

2. 地域づくりの基本姿勢

1　基本姿勢・・・・・・・・・・・・・・・・・P16
2　具体的方向性・・・・・・・・・・・・・・・P18

第 3 章

3. 兵庫丹波魅力化戦略

1　戦略構築における基本的考え方・・・・・P25
2　環境分析・・・・・・・・・・・・・・・・・P25
3　魅力化戦略の方向性・・・・・・・・・・・P27
4　他計画との整合性・・・・・・・・・・・・P35

第 4 章

4. 分野別戦略

1　気軽に楽しむ・・・・・・・・・・・・・・P37
2　じっくり楽しむ・・・・・・・・・・・・・・P43
3　知る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P51
4　戦略構築の効果・・・・・・・・・・・・・P57

第５章

5．構想の実現

1　方向性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P59
2　実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P60
3　実施管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P64
4　ロードマップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・P65

第６章

6．おわりに

1　構想の成果と今後・・・・・・・・・・・・・・P68
2　専門家からの意見・・・・・・・・・・・・・・P69
3　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P70

本書の構成について

本書は、兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくりを目的とした構想を策定することで、今後地域でご活躍の皆さんが、向こう10年を見据えた取り組みを行う際の「よりどころの書」となるように構成されています。

●第1章「構想の全体構造と背景」
構想の策定背景や、理念を掲げ、現状や問題点を整理しています。

●第2章「地域づくりの基本姿勢」
めざす姿を明らかにし、地域全体の魅力化を図るべきことと、その効果について記述しています。

●第3章「兵庫丹波魅力化戦略」
目標実現に向けた環境分析を基に、採るべき戦略として、経営戦略の理論を適用し地域の魅力づくりの進め方について記述しています。

●第4章「分野別戦略」
「気軽に楽しむ」「じっくり楽しむ」「知る」という3つの分野において、どのように考え、どのようなことを行っていくべきかという、基本的考え方を記述しています。

●第5章「構想の実現」
この構想の実現に向けた組織の在り方や地域としての取り組み方を例示しています。

●第6章「おわりに」
構想実現により今後どのような効果が生じていくかを記述しています。

第１章　構想策定の背景と構造

1. 構想の全体構造

構想の理念　「兵庫丹波の農畜産物を核として四季を通じた賑わいを創出する」

本構想の理念（存在価値、何のためにやるのか）は、兵庫丹波の農畜産物を核として四季を通じた賑わいを創出すること、にあります。

めざす姿として、①「若い世代も含めたファン層の拡大」と②「1年を通じて楽しめる兵庫丹波の実現」を掲げ、向こう10年を見据え、これらの実現（実り）に繋がる新たな展開を創出し、地域の永続的な維持発展を図ります。

兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想戦略会議（以下、「戦略会議」と記します。）では、構想の実現に向けた方向性として、兵庫丹波の発展・持続を目論みながら、地域関係者の意見を加味した魅力化戦略により、「気軽に楽しむ」「じっくり楽しむ」「知る」といった3分野での事業計画を定め、事業実施においては、地域関係者が相互連携した横断的取り組みとなることを重視しています。

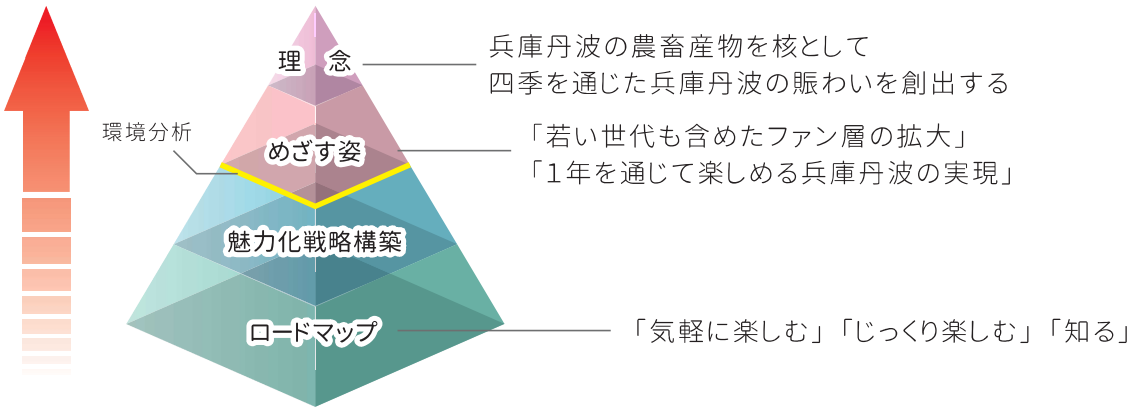


図１：兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想のイメージ

2. 兵庫丹波の農畜産物について

兵庫丹波地域では、濃い霧の発生日数が多く、昼夜の寒暖差が大きい気象条件を活かし、先人の努力による成果を伝承する歴史のあるものに加え、近年、新たに生産が増加している産物等、多様な農畜産物があります。

地域の象徴的なブランド農産物では、「丹波栗食べ歩きフェア」「丹波篠山山の芋フェア」「丹波大納言小豆ぜんざいフェア」等、地域の事業者と連携したイベントを毎年開催しているほか、生産機械や苗木新植への助成、農地の集約等効率的生産、生産技術の向上や生産振興に関する施策を県民局・市・JAが講じています。

今後は、可能な限りこれら魅力ある多様な農畜産物を活かし、兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくりに繋げていくこととし、定期的に開催する戦略会議において、力を入れる取り組みの修正、追加を行い、時勢に沿った手段を選定し、計画に反映していきます。

（1）栗

兵庫丹波では、山あいの傾斜地で、昔から栗が栽培されてきました。「延喜式（905年）」にもその名を残す歴史ある産地で、全国的な知名度を誇ります。

古くは、朝廷や幕府に献上されました。「銀寄」「筑波」「丹沢」などの品種がありますが、いずれも実は大きく甘い味に育ち、高い品質を誇っています。

渋皮煮や甘露煮をはじめ、栗を使った和菓子、洋菓子など加工品も多く、栗生産者団体、JA、商工会、観光協会、菓子・飲食業関係団体、市、県民局が連携し、毎年9月から10月にかけて、食べ歩きフェアを開催しています。

各市においては、苗木や生産・加工機器の購入助成や新植への支援、栗剪定士育成等栽培技術の向上に取り組んでいます。

平成26年に「日本一の丹波栗産地の復活に向けた基本構想」を策定し、兵庫丹波において情報発信・販売促進を行い、地産地消や来丹者の増加を目指しています。

（2）丹波黒大豆・黒枝豆

兵庫丹波の黒大豆は、極大粒な黒色の大豆で高級黒大豆として「丹波黒」と呼ばれています。粒が丸く一般の大豆が百粒重30g程度に対し、丹波黒は80～90gと世界でも類のない大粒です。

丹波地方では、古くから栽培され、西日本の黒豆の主流となっています。丹波篠山の黒大豆栽培は日本農業遺産に認定されました。

煮ても皮が破れにくくよく膨らみ、漆黒の色つやと広がる芳香とモチモチとした食感が極上の美味で、お正月のお節料理や年間を通して煮豆用として重宝されています。和菓子はもちろんのこと、最近は洋菓子などに用途が広がっています。

成分としては、タンパク質、脂質をはじめ、ビタミン B1・B2など栄養が豊富で、またポリフェノールなども含まれていることから、健康食品としても人気が高まっています。

この黒大豆を成熟前の若く青いうちに収穫した丹波黒枝豆は、独特のコクと甘みがあります。近年冷凍品の販売が可能となりました。

（3）大納言小豆

小豆の中で特に大粒な特定の品種群は「大納言」と呼ばれ、その名前の由来の１つに、煮たときに皮が破れにくい特長をもち、いわゆる「腹切れ」が生じにくいことから、切腹の習慣がない公卿の官位である「大納言」と付けられたと言われるものがあります。

丹波市春日町東中は、丹波大納言小豆発祥の地として知られ、古くから生産が盛んです。

約400年の歴史を持つ「丹波大納言小豆」は、俵型で皮が薄く、大粒で煮ても崩れにくく、色つやが美しいなどの特長があり、その上品で風雅な味わいは江戸時代から広く支持され高級和菓子にも用いられ、現在も老舗和菓子店などで利用されています。

生産者団体、JA、商工会、観光協会、市、県民局が連携し、毎年秋から冬にかけて「ぜんざいフェア」を開催し、丹波市内の各店が趣向を凝らしたぜんざいを味わうことができます。

（4）山の芋

兵庫丹波では、江戸時代中期よりその特有の気候風土を生かし、山の芋の栽培が行われてきました。兵庫丹波の山の芋は、ツクネイモと呼ばれる山芋の一種です。長年のたゆまぬ技術革新と品種改良を行い、豊富な栄養を含む栄養価の高い食品として人々に愛されてきました。

長芋と比べるとその粘り強さは４倍と言われています。肉質が緻密で粘りが非常に強いのが特長で、すりおろしてとろろにしてご飯にかけたり、お好み焼きの中に入れて食べるなど様々な用途で味わうことができます。

JA、市、県民局が連携し、秋から冬にかけて丹波篠山市内で「丹波篠山 山の芋フェア」を開催しています。とろろ丼やとろろそば、とろろうどん、ぼたん鍋、山の芋一品料理など、粘りの強さが特徴の山の芋を使った料理が食べられる店舗をパンフレットで紹介し、市内のレストランや直売所などで旬のおいしさを楽しんでもらう取り組みを行っています。

（5）米

周囲を標高 600 ～ 800 メートル級の山々に囲まれており、地形が生む昼夜の温度差や、山々から流れ出る清らかな水に恵まれています。この肥沃な土壌が、粘りと甘みのあるお米を育てています。

兵庫丹波のコシヒカリは、日本穀物検定協会の「米の食味ランキング」において平成25年から8年連続で最高評価の「特 A」に選ばれるなど、高い評価を受け、高級米として全国の百貨店などでも取り扱われています。

9月の上旬から下旬にかけ収穫の時期を迎え、丹波篠山市と丹波市では子どもから大人までを対象に稲刈体験を実施するなど兵庫丹波の米に親しんでもらう機会を作っています。兵庫丹波では酒米も生産しており、五百万石のほか、最近では、兵庫県が育成したHyogo Sake85が新たな品種として加わりました。

（6）畜産物・ジビエ

兵庫丹波では、牛肉や乳製品、鶏卵・鶏肉といった畜産物や、鹿肉などのジビエも盛んです。肉用牛は、「但馬牛」を中心に飼育されています。高度な肥育技術により育てられた牛から生産される牛肉は「丹波篠山牛」「但馬ビーフ」「神戸ビーフ」として出荷され、高級和牛としてステーキや焼き肉などの用途で親しまれ、繁殖技術でも優れており、松阪牛等の素牛になっています。

他にも猪肉を使った名物の「ぼたん鍋」が有名です。丹波篠山市は猪肉の日本の3大名産地とも言われています。猪肉は、豚や牛肉に比べてカロリーが低く、牛肉と比べてビタミン B1が多く、カルシウムは2倍以上です。美容と健康にもいい「ぼたん鍋」は女性からも人気を集めています。

また、丹波市では鹿肉を使った「もみじ鍋」を市内各所で味わうことができます。鹿肉も猪肉のように低カロリーで低脂肪、高タンパクで鉄分豊富な特長があります。

（7） 茶

丹波茶は、日本最古のお茶処で、平安時代には朝廷に献上されていたという歴史を持ちます。日本で最も気温の低いお茶の栽培地域で、現在も兵庫県のお茶の生産量の70%を占めています。

丹波篠山市では、毎年新茶の時期に「大国寺と丹波茶まつり」を開催しています。おいしい新茶ができたことに感謝してお客様に丹波茶を味わってもらうイベントで、毎年県内外からの多くの観光客でにぎわいます。新茶や新鮮野菜の販売のほか、茶摘み体験ができたり、特設のお茶席で丹波茶を楽しむことができます。

（8） その他

兵庫丹波が、山々に囲まれていることや昼夜の温度差が大きいことなど、自然条件や地理的条件に恵まれた地域であることから、花卉・花木（若松、ほおずきなど）、ブルーベリー、薬草、葉物野菜、松茸など多様な作物の生産が盛んです。ブルーベリー等一般の方も収穫体験ができる農園が複数あります。

また、他にも有機野菜をはじめ、黒ごま、スイートコーンやトマト、ぶどう、いちごのほか、川魚のアマゴ等にも力を入れています。

3. 背景

（1）現状と問題点

①農業従事者の問題

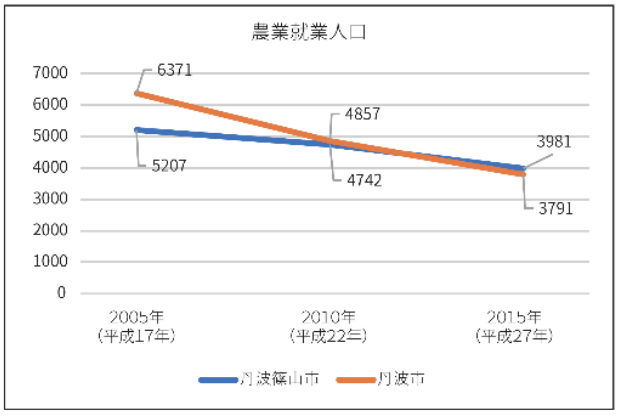
兵庫丹波では、気候風土を活かして様々な優れた農畜産物を育み、地域の魅力が形成されています。

しかしながら、近年は担い手の高齢化や後継者不足、農業・農村の構造の変化、経済のグローバル化の進展、食に対する消費者ニーズの変化等、農業を取り巻く環境が厳しさを増し、地域の活力低下が懸念されています。

●農林業の状況

総農家数、農業就業人口（単位：戸、人）
農業就業人口：満 15 歳以上の世帯員のうち、調査期日前1年間に自営農業に従事した者又は農業と兼業の双方に従事したが、農業の従事日数の方が多い人をいう

区分		2005年(平成17年)	2010年(平成22年)	2015年(平成27年)
総農家数	丹波篠山市	4,567	4,274	3,774
	丹波市	7,182	6,593	5,594
	丹波地域	11,749	10,867	9,368
	全県	104,990	95,499	81,416
	全県比率	11.2%	11.4%	11.5%
農業就業人口	丹波篠山市	5,207	4,742	3,981
	丹波市	6,371	4,857	3,791
	丹波地域	11,578	9,599	7,772
	全県	94,003	73,366	57,085
	全県比率	12.3%	13.1%	13.6%



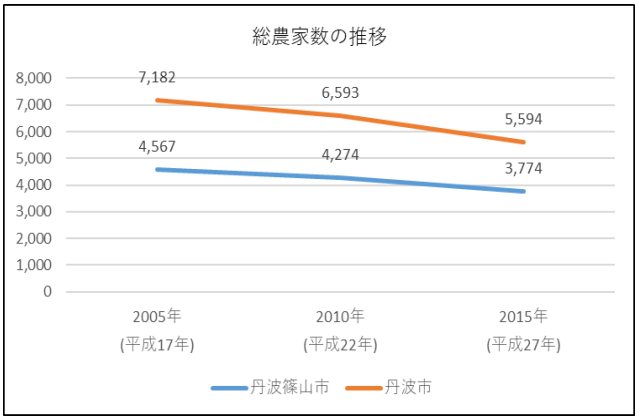


図2：農家数、農業就業人口の推移
出典：「統計に見る丹波地域」より作成

こうした中、地域の関係者は、生産面においては、担い手の確保や生産の効率化などに、流通・消費の面においては、産品のPR活動や6次産業化、農商工連携の推進に取り組んでいるところです。今後兵庫丹波地域の活力を強化するためには、地域が有する強みを活かした農業の持続的な発展と、農畜産物を活かしたツーリズム等の新たな魅力づくりが求められます。

そこで、地域の豊かな自然や歴史・文化に育まれた農畜産物の魅力のアピール、新たな商品やサービス

の開発など、消費者や来丹者をターゲットとした取り組みを通じて地域を活性化し、賑わいあふれる「オシャレな田舎・TAMBA」のイメージも想定しながら、「兵庫丹波の実り・魅力ある地域づくり構想」を策定することとしました。

②他の構想との違い　なぜ、本構想を策定するのか

1）国内の状況：フードビジネスの大きな変化

フードビジネスにおいては、図3のとおり、単なる生産から流通を経て消費者にいきわたるという産品のビジネスだけでなく、6次産業化、ITの活用や観光産業との連携、また、技術を活用したスマート農業やバイオマス等を活用した持続可能な農業の追求、食の国際化といった幅広く多様なビジネスが展開されるようになっています。

この流れの中で、地域がどこで特色を出していくかという、ポジショニングの視点がないと、一過性の事業の繰り返しとなり、経営資源を投資した割には（当事者は精一杯エネルギーをかけているつもりでも）効果が薄いものとなり、逆に戦略的視点を持ち、事業に効率的に取り組む地域が、強固な競争力を構築することも十分考えられます。

フードビジネスの変化と多様性

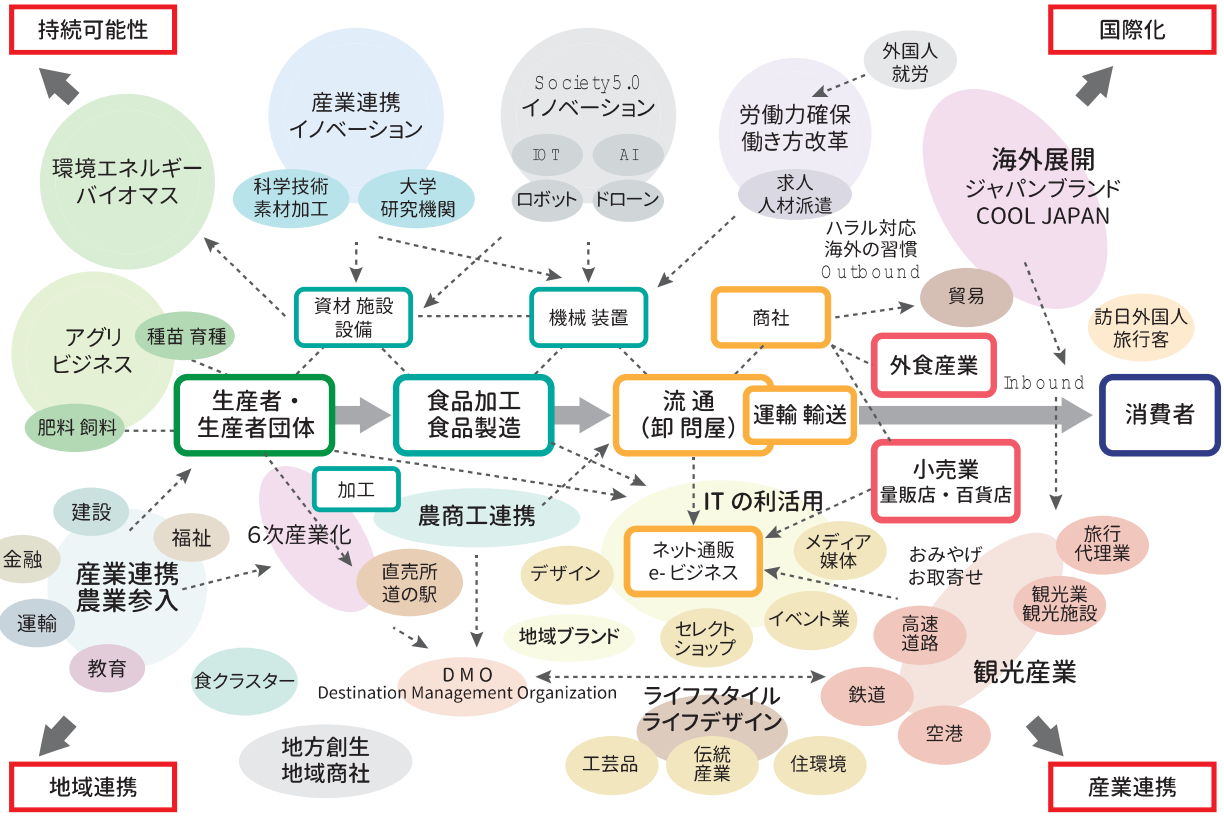


図3：フードビジネスの概要図
出典：（一社）食品需給研究センター資料から作成

2) 新型コロナウィルス感染症問題

新型コロナによる社会変容（外部環境の変化）

社会・ビジネスへの影響

行動制限

- 国内外問わず、密集、接触、移動など、人の行動といったリアルを伴う状況に制限が課された。

ビジネスにおける進化の二極化

- リアルを伴う業種では、変化することができない矛盾や制限された状況下での業務推進により疲弊が生じている反面、ITを利活用できる業種ではリモートなどバーチャルデバイスが浸透し、業務の効率化や合理化など働き方の見直しが進んでいる。

リアルな非日常体験ビジネスの大幅減退

- 食農ビジネスは持続性のある日常と付加価値の高い非日常の両軸で進められてきたが、コロナの影響は、飲食や観光を中心に、リアルな非日常体験のビジネスに大きな打撃を与えている。

生活者の行動変容

リモート中心としたライフスタイル変化

- リモートによる通勤、出張など移動時間の軽減。時間を有効に使えQOL が高まる。リモート対応やバーチャルな質の向上など非日常演出のための投資。

食機会の変化

- 中食、テイクアウト・デリバリー・EC に加えてミールキットなど、内食・自炊の頻度の高まり。店舗から弁当・テイクアウトへ、Uber Eats の利用増、クックパッドやレシピブログの検索増。

トレンド変化

- 日常は、中食、内食を中心に「簡単・手軽・万能」。
- 非日常は、リアルの場合、現状では「感染対策」、バーチャルでは、「生活の質の向上」や「リアルの体感」など。

食農ビジネスの影響

フードチェーン

- 人の行動に制限が課され家近消費にシフトしたことで、従来の日常消費のうち、近所のスーパーやCVSは加工品を中心に売上増。
- 外食・観光の売り上げ減少は壊滅的な状況が続き、付加価値の高い非日常消費は大幅減となっている。
- フードチェーン全体では市場の縮小が懸念される。

食農ビジネス

- 飲食や観光との連携など、付加価値の高い分野に進出したビジネスには大きな影響がでている。特に支援事業などで急激に規模拡大を図ったことで固定費が増加、内部留保が低い事業者には大きな影響。
- ビジネスの複数展開などリスクヘッジを図ってきた事業者の被害は少ない。

図4：新型コロナによる社会変容（外部環境の変化）
出典：（一社）食品需給研究センター資料より作成

日本政府は、大都市部における感染経路が明らかでない新型コロナウィルス感染症の感染者の急増を踏まえ、令和2年4月7日に兵庫県を含む関東・近畿・九州圏の7都府県を対象とする改正新型インフルエンザ等特別措置法に基づく「緊急事態宣言」を行いました。

「不要不急の外出自粛の要請」を含む緊急事態宣言の対象は感染拡大と共に全国へと広がり、イベント自粛、外出自粛要請等に伴う消費の落ち込みや国内外の観光客の減少、従業員等の休業に伴う工場の操業停止、サプライチェーンへの影響による生産や工事の遅れなどが生じています。

さらに、外食、観光産業等をはじめとする中小企業・小規模事業者や農林漁業者にとっては、事業存続にも関わる重大な事態が生じ、実態経済への影響も深刻化しています。

国外においても、中国や韓国に加え、欧米における新型コロナウィルス感染症の急激な拡大、アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国の入国規制などに伴う人や物流の停滞が避けられず、株価が乱高下を繰り返すなど、世界経済は混迷の度合いを深めている状況にあります。この緊急事態宣言以後、感染を防ぎつつ、経済を如何にして動かしていくかが各地域での課題となっています。

また、ウィズコロナと言われるように、リモートを中心としたライフスタイルへの転換等、社会生活自体を見直す動きが出ており、マスクの着用や他者との距離確保（ソーシャルディスタンス）、手指消毒の徹底といった基本的な感染防止策、リモートワークがこれまでにないスピードで浸透していくなど、新たな生活様式が定着しつつあり、既存の産業もそうした新生活様式に対応、あるいは支援する機能を有する必要が生じています。

以上の状況を踏まえ、全国各地域で策定されている、従来型の戦略や構想は、内部環境・外部環境の変化がさほど大きくない中で策定されてきましたが、フードチェーンの多様な変化に加え、近年の災害や新

型コロナウィルス感染症問題のように、**地域に多大な影響を与える外部環境の変化が生じるようになったことで、今のままでは対応できない時代を迎えています。**この流れにおいて、兵庫丹波が持続的発展を伴った魅力ある地域づくり活動を行えるかということを考察点とすると、現状兵庫丹波において、これを明確にした戦略や構想は存在しないため、今こそ策定する意味があると考えます。

3）兵庫丹波の現状

理念実現に向けた構想策定に当たり、人口、観光客数と来丹者の年齢層に着目し、現状を次のとおり分析しました。

ア　人口：向こう10年を見据える必要について

人口の推移（単位：千人）

区分	1990年 平成2年	2000年 平成12年	2010年 平成22年	2020年 令和2年	2030年 令和12年	2040年 令和22年	2050年 令和32年
丹波篠山市	42	46	43	40	35	30	25
丹波市	73	73	67	61	53	45	36
計	115	119	110	101	88	75	62
（全県）	5,405	5,551	5,588	5,543	5,118	4,686	4,231
全県比率	2.1%	2.1%	1.9%	1.8%	1.7%	1.6%	1.4%

※総務省統計局「国勢調査報告」（2020年（令和2年）は速報値）

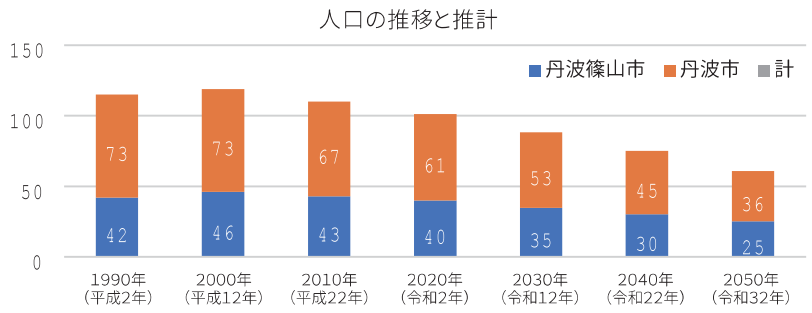


図5：人口の推移と推計
出典：「データで見る丹波地域」より作成

図5のとおり、兵庫丹波の人口は、現状として減少の傾向にあり、現在（令和2年）からみて、10年後の令和12年には、人口が1万3千人、13．8%減少するという推計がなされており、少なくとも、向こう10年の間に、この地域には人口に起因して農業を始めとする産業や地域における暮らしに大きな変化が訪れる可能性があります。

イ　観光入込客数の推移

地域／項目	全　県	神　戸	阪神南	阪神北	東播摩	北播摩	中播摩	西播摩	但　馬	丹　波	淡　路
平成29年度	139,047	39,330	14,295	16,831	9,305	13,957	10,963	6,605	10,094	4,655	13,012
平成30年度	136,964	35,380	14,478	19,944	9,403	14,045	10,328	6,248	9,888	4,683	12,567
令和元年度（速報）	136,508	35,420	14,727	18,935	9,848	13,941	10,366	6,187	9,409	5,072	12,603
対前年度	-456	+40	249	-1009	+445	-104	+38	-61	-479	+389	+36
	-0.30%	+0.1%	+1.7%	-5.1%	+4.7%	-0.7%	+0.4%	-1.0%	-4.8%	+8.3%	+0.3%

図6：兵庫県観光客動態調査結果

兵庫丹波の観光入込客数は、過去3年間で450万人の水準で推移しており、県民局単位数値で比較すると、区域の面積規模にもよりますが、最も少ない地域となっています。

しかし、過去3年の推移をみると、入込客数は増加し、全県に占める割合も増加しています。

直近での入込客数の増加は、ゴールデンウイークが長期間になったことにより、丹波並木中央道公園、兵庫陶芸美術館、丹波竜の里かみくげ等への入込が主要因になっています。

ウ　入込客に占める、日帰りの割合（令和元年度）

丹波は、比較的日帰り客の多いエリア

全　県	神　戸	阪神南	阪神北	東播摩	北播摩	中播摩	西播摩	但　馬	丹　波	姫　路
91.3	86.5	95.3	98.1	95.2	96.0	90.5	90.0	79.6	95.8	90.2

図7：令和元年度兵庫県観光客動態調査結果（速報）

また、入込客数は、日帰り客が約95%となっており、近隣県民局管内の数値と比較して日帰り客の割合が高くなっています。

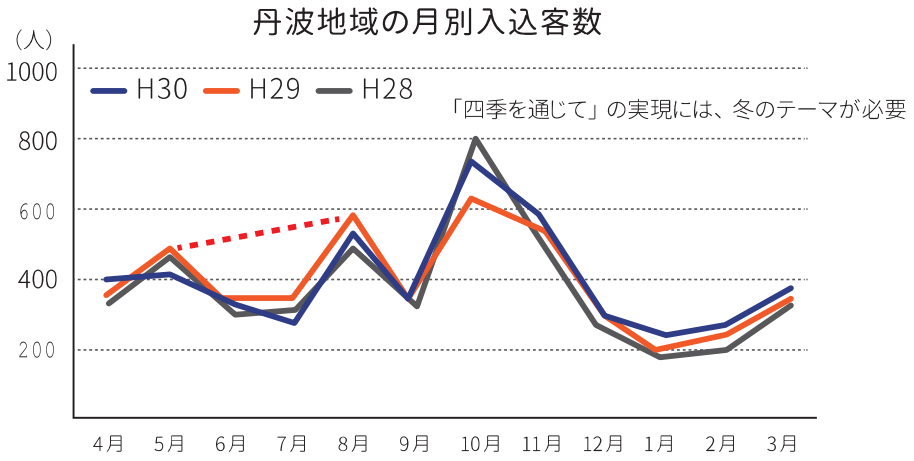


図8：丹波地域の月別入込客数
出典：兵庫県観光客動態調査報告書から数値抽出し作成

過去3年間の兵庫丹波への月別入込客数の推移をみると、毎年12月頃から翌年2月頃までは、客数が減少しています。四季を通じた入込客数の確保は、後述の新しい生活とも関連し、地域産業の経済的リスクを担保することにも繋がるため、冬の対策を考える余地があります。

構想策定にあたり、地域関係者等へのヒアリングを行ったところ、冬季の観光入込客数の落ち込みの理由として「兵庫丹波は、冬場は積雪が酷く、訪問しにくいという認識が形成されているのでは」ということを挙げています。

しかし、神戸地方気象台「兵庫県の天気」によると、丹波篠山市・丹波市に過去3年間発令された大雪警報、大雪注意報の件数と兵庫県全体の発令件数に占める割合は、それぞれ4件・10. 3%、15件・8. 0%であり、必ずしもこの地域だけに雪が降るとは言えません。

したがって、天気や気温に関係ない、兵庫丹波を訪れたくなるような地域の魅力づくりの可能性があります。

これに関連し、兵庫県観光者調査8回目（2013兵庫県）によると、
1）兵庫丹波の訪問者はその後大阪(40%)か京都(51．1%)に立ち寄る。
2）自動車での来訪（68%)、家族(単身29%その他17%)が多い。
3）25歳以下の世代が兵庫丹波を訪れるという意思決定をする全年齢層における割合は(約9%)少ない。
4）兵庫丹波を人に勧めたいと思う理由に、自然景観・雰囲気(69．8)、歴史を感じる(52．4)、温泉(36.5)の順である、というデータがあります。昭和の時代に価値が見出されていた果物等高付加価値農畜産物も時代と共にファン層が高齢化し、徐々に消費が減少し、顧客の若がえりなどを余儀なくされる事例も増加しており、兵庫丹波においても今後同様の事態が生じる可能性があります。

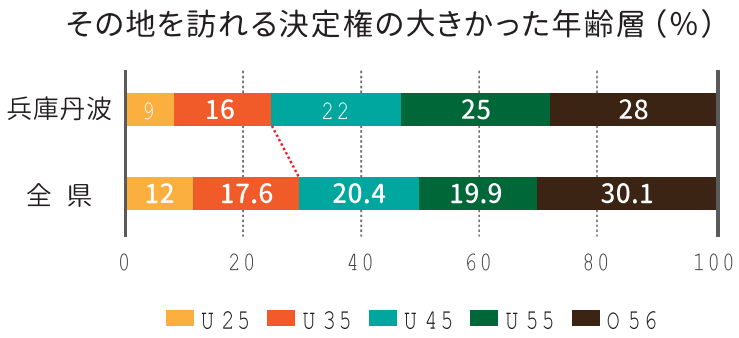


図9：その地を訪れる決定権の大きかった年齢層
出典：兵庫県観光者調査8回目から数値を抽出し作成

4. 課題

課題の提起（戦略会議からの投げかけ）

まず、国内情勢においては、フードチェーンの大きな変化や新型コロナウィルス感染症問題等の想定しないリスクが発生しており、「今までの構想や戦略では、対応できない」事態が生じているものと言えます。

また、兵庫丹波においては、観光入込客数は兵庫県内にある10の県民局管内では最低数となっており、季節別では秋の集客がやや強く、冬の弱さが目立ちます。

宿泊客数割合も県全体の平均値を下回る結果となっているほか、昔ながらのファンは数多くいるものの、若い世代における兵庫丹波の認知度は高いとは言えません。

こうした状況を踏まえ、理念「兵庫丹波の農畜産物を核として四季を通じた兵庫丹波の賑わいを創出する」を実現するため、兵庫丹波では、上記問題解決に取り組むべく、地域・分野間の連携を強めながら、向こう10年を見据えた永続性のある地域全体の魅力化を進めていくことが、課題と考えます。